

# 手ほどきスワッピングで

## 墮とされた私

小説：木森山水道（夜山の休憩所）

### 「ご挨拶」

この度は、DL & ご鑑賞いただき誠に有難うございます。  
気分転換、活力復活、ぐっすり眠れる等の効用が現れれば幸甚です。

### 「製品版と体験版の相違点」

体験版は小説の約「半分」を収録、挿絵はモノクロ、  
製品版は小説の「全て」を収録、挿絵はカラー、  
という具合に異なっております。  
この他に違いはございません。

### 「ご注意ください」

- ・PDF閲覧ソフト（Adobe Reader 7と9と で確認済み）によっては「見開き」で見る際、ページが右から左へ進みます。
- ・本製品はフィクションです。個人の範囲でお楽しみ下さい。

挿絵はメーカー様の利用規約に基づいて

- 「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」（G・J?様）と、
  - 「セックスライフ」（G・J?様）を利用して作成しました。
- 尚、当サークルはG・J?様とは無関係です。

『佐野俊英があなたの専用原画マンになります』  
利用規約に基づく表記 シリアルコード S/N:GJ0079908

目次

プロローグ	.....	3
第一話	ぎこちない蜜時	5
第二話	いやな男	16
第三話	フェラチオ・レッスン	21
第四話	パイズリ・レッスン	33
第五話	ローション・レッスン	46
第六話	ロストバージン・レッスン	55
第七話	完熟スワッピング	69
エピソード	.....	84

主な登場人物

- 八幡美奈 十八歳。眼鏡をかけた美人女子大学生。眼鏡をかけている。
- 八幡玲奈 二十歳。美奈の姉である女子大学生。美人でふしだらな性格。
- 富山誠一 十八歳。美奈の幼馴染。大学入学を機に告白し、美奈の恋人となる。
- 東都勇二 二十一歳。玲奈の恋人である大学生。浅黒い肌のハンサム。金持ちの息子。

## プロローグ

「ん……ハああ、お、オチンポが奥を突いて……ンああ……気持ちいい、はあッ……ンあああッ……！」

富山誠一は彼女とラブホテルにいた。

ベージュの壁。ピカピカの冷蔵庫。一際大きなプラズマテレビ。備え付けのブルーレイプレイヤー。

シャンデリアみたいな豪華な照明はオレンジ色の光を放ち、二十畳ほどの室内を隈なく照らしている。

落ち着いた内装の居心地のいい室内には、無論ベッドもある。

ダブルベッドだ。ついさつきベッドメイクを済ませた様な寝台の端に座り、持ち込んだアダルトDVD 誠一の夜の戦友であり夜伽相手 を流していた。

（黙ってるけど、どう思っ見てるんだらこいつ）

隣には八幡美奈がいる。

誠一の恋人で、委員長系の美人。

歳は誠一と同じ十八。先月、現役で大学入学を果たしたのも同じだ。

四角い眼鏡の奥には、知的な双眸が輝いている。艶やかな黒髪をポニーテールにしているとところが清楚さを際立たせていた。

ホテルで入浴を済ませた後なので服を着ていない。

ただ、誠一がプレゼントしたネックレスだけを付けている。

白さの強いきめ細かい肌。

たつぷりした釣り鐘型の乳房。雨後のサクランボのようにツヤツヤしている薄ピンクの乳輪と乳首。

ウエストは細く、尻たぶに続くラインは急勾配を描いている。腰掛けているので、柔尻肉3はムニユリと潰れ、量感と柔和さを存分に見せつけていた。

知性漂う端麗な細面と、群を抜くグラマラスな身体の美女を世間が放っておくはずはなく、繁華街でスカウトを受けたことは一度や二度ではないらしい。

「あつ、あつ、い、イクッ、お、オマンコイクウ……ああ、出して、ザーメン、私のオマンコにいつぱい……ああ、クウ……ッッッッッッッ……！」

画面の中の女性は、自分たちとそう歳は変わらないだろう。美奈には見劣りするものの、

## 私とされたでスワッピングで手ほどき

童顔は愛らしく、スレンダーなスタイルも魅力的。

筋肉質で浅黒い肌の中年男優を正上位で受け止めている彼女は、顎を跳ね上げて派手に嬌声を上げた。

男優は短く鋭い呼吸を吐きながら、M字に開かれた彼女の太ももを抱え、密着した股間を下腹部で押す。

ほどなくして男優が離れると、男根の形に広がった陰部からドロリとした白濁が流れてきた。

そして、満足そうに呼吸を荒らげている女優の顔を映しながら画面は暗転する。

「セックスはこんな感じだ。最初からこんなにハードにする気はないから、安心してくれないよな」

リモコンで機器を止めた誠一は美奈の横顔を見た。

# 第一話 ぎこちない蜜時

「え、ええ……」

普通に答えたつもりだったが、声はまともに掠れていた。

幼馴染みの誠一に愛の告白をされたのは、大学の入学式を終えた後。

新生活の始まりは慌ただしく、結局、落ちていたのはゴールデンウィーク。

大型連休初日の誠一の誘いにして、思いを確かめあった後初めてのデートは、ラブホテルが終着点だった。

美奈が性交渉の経験がないと見越したのだろう、予習がたらアダルトDVDを見せられた。

（ふう……… 覚悟を決めたつもりだったけど……… あんな実演を見せられたら………）

誠一のこととは昔からよく知っている。

スポーツマン然とした顔は整っている方で、告白を受けたことはないらしいが、気さくな性格も合わさって、高校時代は女子に密かに人気があった。

第一話 ぎこちない蜜時  
細身なものの、野球で鍛えられた身体は引き締まっている。はしたないし恥ずかしいの

で直視はできないけれど、女としては頼りがいを感じて悪くない。

嫌だと思う要素が見あたらず、好感も持っていたので、告白を受けたという経緯だった。情熱的な動機や過程はなくとも、一度恋人同士になったのなら仲睦まじくしなければならぬ。

ふたりとも子供ではなく、加えて好きあっているのだから、肉体関係を持つ覚悟は済ませていたつもりだったのだが。

「優しくするから、そう硬くなるなよ。嫌ならやめるからさ」

並んで腰掛けていた誠一が片側半身同士を密着させ、遠い方の肩を抱いた。

気遣い溢れる所作だった。

セックスに怖じ気づいた恋人を労る想いが伝わってくる。

（んっ………！）

肩が勝手に大きく跳ね、身体が縮こまった。異性とここまで接近するのは初めてだった。しかもふたりは裸同士。

「あ、悪い……」

「こ……… こういうのは初めてで、ちょっと驚いただけです……… 続けてください………」

母親に咎められることを恐れた子供のよう

## 私とされた墮でスワッピングでどきどき手

な誠一に、美奈はぎこちない笑みを向ける。

美奈は、委員長タイプと呼ばれるような見た目通り、品行方正に生きてきた。

女として男と接するのが初めてなだけに抵抗がある。

緊張で心臓が早鐘を打ち、正直離れたくて仕方がないが、ここで彼を拒絶するわけにはいかない。

こちらの心情を優先させてくれているのを見せられれば尚更だった。

誠一は頷くと、おずおずとまた撫で肩を抱く。

きめ細かい白肌と筋肉質な身体が触れあう箇所から、誠一の体温が流れ込んでくる。

自分の体温も、彼の身体に吸収されているのだらう。

「柔らかくてあったかいな……これが女の……美奈の身体なんだ……」

ぬくもりだけでなく、肌の感触も感じあっている。

筋肉質な彼の肌触りは岩のように硬くて、それほどいいとは思わないが、頼もしさは感じる。

誠一は呼吸音を静かに強めながら、撫で肩に触れていた手のひらをスライドさせる。

かたつむりの早さで鎖骨に滑り込み、そのまま下降。ドーム上に膨れている上乳に触れてきた。

「っ……ん……」

「おっぱいの肌もスベスベだ……それにでかい……これが美奈のおっぱい……」

しきりに誉めながら、上乳に何度も円を描く。

乱暴にはしないという意志が籠もっているが、乳房への劣情に溢れたタッチだった。軽く触れるタッチは産毛の先を撫で、毛根に伝わる振動が乳肌の根本を抉る。

ピリピリという仄かな刺激電気が生まれ、蚊に刺された痒さを何倍にも希釈したむず痒さが上乳肌に広がっていく。

「なあ……サイズはいくつなんだ？」

嫌がられないことに安心したのか、言いたくないなら答えなくていいという雰囲気醸しながら、失礼なことを聞いてくる。

「バストサイズなら……ひゃ、百一のIカップ……です……」

「……大きいとは思ってたけど、メートルオーバーかよ……すげえ」

相変わらず愛撫は丁寧だが、誠一の乳房を見る目に脂ぎった色が混じる。

中学時代はそれほどでもなかったけれども、高校にはいると急に育ち始めたバストは、よく男子の視線を集めた。街を歩いていてもそう。

美奈って、真面目そうなのに裏で男に揉まれているの？などと女友達にも羨望と嫉妬混じりによくからかわれていた。

知り合いや見知らぬ男の視線を胸で受け止めさせられるのが、どれほど恥ずかしくて苦痛なのか考えもせず。

そんな風に男の好奇の目を集め、女子の話のタネにされていたことは、三年間クラスが同じだった誠一も知っている。

女子に好かれるスポーツマン然とした男だから、他の男子同様に露骨に見てくることはなかったものの、それでもチラチラ見てくるのには気づいていた。

先ほど見せられたアダルトDVDの女優も胸は大きかった。

そういう趣味なのだろう。

大好きな豊胸の感触を楽しむだけでなく、今まで誰も触れず、欲望と羨望を受け続けていた巨乳を独占しているという優越感も、噛みしめているのかも知れない。

「男は、大きな胸は揉みたくなるのでしょ？」

……揉んでもいいですよ……」

恋人としての義務感に駆られておずおずそう言っていると、彼は静かに首を振った。

「いいって。こういうこと初めてなんだろう？だからそういうのは後で、な」

脂ぎった色を瞳の隅に押しやりながら、彼は穏やかに微笑する。

アイドルというよりも汗や泥と相性のいい顔には微笑みなど似合わないが、自制心と思いやりの賜だと思いと温かみを感じた。

誠一の手のひらは勃起し始めていた乳首を一撫でし、上乳と線対称の下乳をなぞって鳩尾に降りる。

贅肉を絞りきった平面的な腹部をさすり、へその下に向かう。

「ひゃんっ……そ、そこは……」

軽く開かれた美奈の太ももの間に、指の束が潜り込む。

触れるか触れないかのタッチで敏感な場所に触れられて、美奈はビクッと身を震わせた。

「嫌だったら言ってくれよ」

短い小指と親指をさしおいて、人差し指、中指、薬指の二本が股間を静かに撫でてくる。

紐の太さ程度の割れ目を作る大陰唇を下から上、上から下へとゆっくり擦っていた。

## 私とされたでスワッピングで手ほどき

「んっ……嫌じゃないですけど……ふぁア」  
上乳を愛撫されていた時よりも強いピリピリ感。むず痒さを伴い、瞬間に股間全部に広がっていく。

深爪された指の腹の感触をそつと擦り付けられる度に、肉付きの薄い肉の土手は小刻みに振幅する。

「美奈のここ、プニプニだな……触ってるだけで興奮するよ……」

胴底の肉花卉は肉付きが薄いとはいえ、骨が入っていない脂肪の塊。

そのふくよかさが心地いらしく、誠一はますます呼吸を上擦らせる。

他の男が触れられない秘部を愛撫する精神的な喜びもあるだろう。

触れられている美奈も、異性に初めて触らせている羞恥で股間を火照らせていた。

女性共通の性感帯を愛撫されることからくる仄甘い快感も、体温上昇に拍車をかけている。

淫裂は緩慢に開閉を始め、その奥からは甘酸っぱい愛液が音もなく溢れてきていた。

クチュ……。

「あつ……そ、そこには……んっ……」

誠一は束ねた指を大陰唇に宛てがいがながら、中指を鉤状に曲げていた。

愛撫を受けて開き始めた処女淫裂に指先が浅く埋没している。

深爪された爪、指の腹、側面に処女膣肉が絡みつく。指先は纏わり付く肉襞を引きずりながら、もう少し奥に進んだ。

「すげえ……指に吸い付いてきて……奥に引き込まれる……まるで唇で吸われてるみたいだ……ん、これは」

第一関節まで埋めない内に、爪先が処女膜に触れ、ツンツンと小さく突き上げる。

(つく……)……誠一の指先が私の処女膜に触れてる……！)

自分でも触れたことのない処女の証に、異性の指が触れている。

恋人同士なのだから、セックスをしてもおかしくない歳なのだから、恋人と認めた男に触れられるのは不自然なことではない。

しかし、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。

身体の内部に他人が触れている恐怖も微妙だがある。彼が自分を害しないとはわかってるのだが。

羞恥と恐れが入り交じり、美奈はまた縮こ



まった。

「あ、ごめん……いきなりだったよな」

心の底から謝罪して、誠一は指を抜こうとした。

纏わり付く肉ヒダを傷つけないよう、ゆっくりと。

「いいです……から……私は大丈夫なので続けてください……ハッ」

美奈は誠一の手を取り、離れそうになっていた指先を強引に膣内に戻す。

その拍子に、彼の爪先が処女膜を軽く引っ掻いてしまう。

突然走った刺激電気のせいで美奈の背中中は伸び上がり、弾んだ豊胸がタップンと鳴り響く。

彼と自分は恋人関係。これくらいは我慢しななければならぬのだ。

「わかった、サンキュな。でも、本当に嫌な時はそう言ってくれよ」

いじらしい恋人の手をそつとふりほどくと、誠一の指は膣を優しく愛撫し始める。

今度は人差し指だった。

「うつく……また絡みついて……美奈のオマンコ、指を入れてるだけで気持ちいい……」

チンポまで入れたらどうなるんだ……才おっ」

自分の指が行き来する股間を凝視しながら、

誠一は指の抜き差しを繰り返す。

速度は亀の歩みほど。指の腹と深爪された指の先端が、絡みつく肉ヒダを擦ってくる。

初めて秘部を愛撫されることに羞恥と恐れを感じていた美奈だったが、強引なところのない所作に、次第に呼吸を乱していく。

「はあっ……ああ、アソコが熱い……誠一の指で掻き回されて……いやらしいお汁が出て……んんん」

男の愛撫に反応し、処女膣は愛液の分泌を加速させる。

膣内は熱を持ち、淫らな疼きが湧いてきた。処女膜の奥の方が甘く痺れ、そちらも擦られたいという欲求が強くなる。

「これ位濡れてればいいだろうな……美奈、仰向けになってくれるか」

誠一は指を引き抜くと、汚れていない方の手で美奈をそつと仰向けにさせる。

彼女は逆らわず、身を委ねた。

「それじゃ、いくよ」

染み一つなくほっそりした太ももを優しく

開かせ、その間に身体を置く誠一。

彼女の股間とあと十センチ程という距離で膝立ちになると、逸物の根本を掴む。

## 手ほどきスワッピングで墮とされた私

「あ……………」  
美奈は固まった。

ウブな故に、なるべく意識してこなかった異性の生殖器を目にして息を呑む。

初めて直視したペニスは、カチカチに勃起していた。

長さは十五センチはあるだろう。

皮を被っていない亀頭はマグロのように赤く、形はイチゴを逆さにしたのと同じだった。

青い血管が浮く肉竿はやや黒みがかった肌色で、太さは指で囲めるかどうかという位。

ムダ毛処理された脇毛や胸毛、足の毛同様に股間はツルツルだが、そのせいで妙な迫力を醸している。

肉棒の根本でぶら下がる陰囊も手のひらでようやく掴みきれるところに大きい。

(これを……………私の中に入れる……………?)

誠一は膝立ちのまま摺り足で距離を詰める。チユリツ……………。

互いの太ももの付け根が軽く触れあい、亀頭の穂先が淫裂に浅く埋まった。

あと少し、誠一が腰を突き出したら肉棒は美奈の体内に入り込む。

「い、いやああああツツツ！」  
気付いたら叫んでしまっていた。

前戯で身体に広がっていた甘い感覚が消し飛んだ。

異性を受け入れるという人生初めての行為。今までしたことがなかったのに、太く長い肉棒を体内に進入させることへの恐怖。

セックスにウブでも、知識は耳に入り込んでくる。処女喪失は相当痛いという話も聞いていた。苦痛など嫌に決まっている。

「ああ……………ごめんなさい……………私、誠一の恋人なのに……………でも……………」

恋人であるのなら、パートナーを身体と心で受け入れなければならぬ。

そう、生真面目に信じるだけに罪悪感はいとしおだった。

いくら温厚な彼でも、土壇場で拒絶されたら怒るだろう。ひよっとしたら殴られるかも。

「いいって。初めては誰だって怖いに決まってるよ」

震える子犬のような美奈にかけられたのは罵声ではなく労りの言葉だった。

恐る恐る目を向けると、誠一は父のように頷く。

「俺も童貞だからさ。本とかDVDで勉強して、それを披露してみたけど正直おっかなびっくりで……………ゆっくり馴れていけばいいさ」

目の前に抱ける女がいれば、男は狼になると聞いたことがある。

肉棒がガチガチになって反り返っているのは、それだけで男が苦しいというのも耳にしたことがあった。

それなのに、自分のことを気遣って嫌な顔一つしない誠一に、美奈は胸を熱くさせる。

「その練習つてわけでもないけど、代わりに手コキしてくれるかな……嫌ならいいんだけど」

「手コキ？ 手コキつてなんですか」

心優しい恋人に聞き返す。彼のためなら、できる限りのことはしたい。そう思っていただけに、清涼感ある美声は勢いこんでいた。

「こう、手で握つてペニスを扱くんだ。D V Dでもやってたんだけど」

誠一のジャスチャーを見て、美奈は得心する。高校時代は学年上位で、全国模試の結果にも名前を残すほど成績優秀だった頭脳は、先ほど鑑賞した内容を明確に覚えていた。

「わかりました。よいしょつと……んっ……」

第一話 AV女優のしていたことを思い出しながら、彼をそつと仰向けに寝かせると、自分は肉棒に顔を寄せる。

(ツう……触れているわけではないのに……こんなに熱気が……)

入浴したばかりなので無臭だったが、亀頭から放たれる熱気は梅雨の大气のように熱く湿っている。

(別にこれには危険はないのだから)

怯んだ自分に言い聞かせて軽く握る。

長い肉棒は女の手のひらでは掴み切れず、根本からカリの数センチ下までをカバーするので精一杯だった。

(熱いつ……何これ……これが人の身体の一部なの……?)

肉棒は相当熱を持っている、まるで熱湯の塊を握っているよう。

(柔らかいのに硬くつて……ビクビク脈打つていて……しかも重い……)

竿の肌は鳥の皮みたいに柔らかいのだが、薄皮を隔てた向こうの芯は異様に硬い。金属の塊と言うよりは、肉がミツシリ詰まった感触だった。

肉が詰まっているという点では乳房も同じだが、血が流入した海綿に包まれる硬さは脂肪の塊などよりもずっと雄々しい。

さらに、肉棒は手のひら全部を震わせるような力強い脈動を繰り返している。

## 私とされた墮つでスワッピングでどきほの手

重量感も甚だしく、まるで鉄の棒を掴んでいる気にさせられた。

「嫌ならいいんだぞ。無理はしなくても」

「ううん……これ位はさせてください」

挿入を免除してもらえたのだ。その気持ちにはこちらにも応えなくてはならない。

シュツ……シュツ……シュツ……シュツ……

軽く握ったまま、美奈はこわごわと肉棒を扱く。

DVDの映像を思い出しながら、上目遣いで誠一の反応を見て行う。

何しろ、性感帯であると同時に子作りをするのに大事な器官なのだ。丁寧に扱わなければいけないだろう。

鼻先にある亀頭に呼吸と鼻息を音もなく吹き付けながら、美奈は注意深く手奉仕する。

「どうですか？ 気持ちいいですか？」

「ああ。美奈の手がひんやりしていて柔らかくて……でも、もう少し強く握って強く扱いてもいいよ」

美奈は目だけで頷くと、ほんの少し握力を強め、扱く速度も微かに上げる。

肉棒はますます熱くなり、手のひらや指と密着している砲身が短く鋭い脈動を繰り返す。

（すごい……ますますドクドクツツと脈動して……これでいいんだ……私、誠一を気持ちよくさせているんだ……）

DVDの中では、男優も気持ちいい気持ちいいと言いながら手コキされている肉棒をビクビク暴れさせていた。

どこか恍惚とした風に目を細め、歯を軽くかみ合わせている誠一も気持ちよさそうに見える。

（ああ……でも……見られてるのは恥ずかしい……）

誠一の視線は四つん這いで手コキをしている美奈に注がれている。

百一センチエカップのバストは、重力に引かれて新幹線の先端のように伸びていた。

手コキをする弾みで、ゆさゆさと前後に揺れている。

先端では、貝柱みたいに勃起している薄ピンクの乳首がピンと立っていた。

艶やかな黒髪の後れ毛も、鎖骨の前で湯気のようにゆらゆらと揺れている。

うなじ、撫で肩、細い腕、乳肌、天井に向かって突き上がり気味の豊かなお尻。それらはきめ細かい雪肌で、室内照明を反射して白い輝きを帯びていた。

第一話 ぎこちない蜜時



## 私とされた墮でスワッピングで手ほどき

「美奈……そろそろ出そうだ……ううっ……  
もう少しだけ強く握って扱いてくれないか……  
頼むっ」

体力のある男だというのに、誠一は随分息を乱している。

手の中の肉棒も、まるで暴れているようにビクついていた。

亀頭の先からは、磯の香りめいた臭いを放ちつつ、先走り汁が漏れ出している。

「うん……思い切り出してくださいね……はあ……はあ……私の手で気持ちよくなってください」

DVDで女優が叫んでいたのと同じような台詞を、羞恥心と折り合いをつけて口走ってみる。

すると、誠一の肉棒はさらにビクビク震えだした。睾丸が内部に向かってせり上がり、陰囊が平面同然になっていく。

鈴口の先走り汁が、肉棒を握る美奈の手に落ちてくる。

肉棒を扱きながら、亀頭が膨れている光景を見ていると、美奈の心臓もドキドキし、愛撫もされていないのに身体が火照った。

そうして、肉棒に淫らな熱い吐息を吹きかけつつ、後れ毛と乳房を揺らしながら、二チ

ヤニチャという卑猥な水音を立てて扱いていと、

「美奈……出すよ、はあ、はあ、美奈の手コキでイク……くうッ、射精する！」

ドビュ~~~~！ ドビュビュビュッ！ ド

クンドクンドクン！ ベチャベチャ！

「ああ……ああ……はあ……はあ……

……出てる……これが射精……」

間欠泉のように噴出した白いマグマは、美奈の頭上を越え、雨のように降り注ぐ。

途中で枝分かれした精液も飛び散って、黒髪、額、眼鏡、頬、唇、撫で肩、上乳、背中、お尻など、身体全部に降りかかる。

ネバネバの熱い汁が自分を汚す不快感を感じるより先に、美奈は初めて目にした射精に呆然としていた。

DVDで同じような様子を見てはいたが、今は自分の手淫で射精を起こしたのだ。

恋人同士ならば当然とは言え淫らなことをした羞恥心、恋人を絶頂させた達成感、むせかえるような磯の香りを放つ粘液塊の衝撃。様々な感情がない交ぜになり、若娘を思考停止させる。

「み、美奈……もっと扱いてくれっ……頼むからッ」

## 第一話 ぎこちない蜜時

せっぱ詰まった彼の声にハツとして、求めに応じて手淫を再開させる。  
すると、手の中の肉棒は再びポンプのように引きつり始め、美奈を汚す汁を吐き出すのだった。

第二話 いやな男

「それじゃ、忘れ物はないな」

「はい。荷物は全部持ちましたし、後始末を終えたのも確認済みです」

乾いた精液でガビガビになった髪や身体を風呂場で清めた後。

誠一と美奈は借りた部屋を去ろうとしていた。

彼に射精させた時の衝撃は、まだ余韻として残っている。

鮮烈な体験だったと思う。

全身が精液塗れになったことは、実のところ、彼が平謝りしてくれたり、お姫様の侍女的に身体を流してくれなくとも収まらない程ではなかった。

栗の花の匂いを放つネバナの白濁汁への嫌悪感は何でもないが、それよりは恋人に喜んでもらえた嬉しさの方が大きい。

「今日は悪かった……綺麗な身体を汚しちまっつて」

「いいんですよ。もう謝らないでください……その……また来ましようね」

出る直前、またうなだれた誠一を元気づけ

たい一心で、そんな言葉を口にした。

言ってから赤面してしまったが、彼はぱあつと顔を輝かせてくれたので、まあいいだろう。

ふたりはホテルの廊下に出る。

誠一はホワイトのポロシャツにグレイのスラックス、美奈はYシャツタイプの白い上着に紺のキュロットスカート、それに夜空色のパンストという出で立ちだった。

このホテルは、従業員と顔を合わせずにチエックインとチエックアウトを済ませられる。セックス目的のホテルで他人と顔を合わせる気まずさを排除した便利なシステムなのだが、それだけに不意打ちは痛かった。

「あら、美奈じゃないの」

通りかかった部屋の扉から出てきたカップルの女が、陽気な声で名を呼んだ。

低くて芯の強さを感じさせる美奈の凜声とは対照的だった。

それなりに綺麗ではあるが、知性が抜け落ちていて、桶の底を叩いたようなあっけらかんとした声。

思わず美奈が振り向くと、そこには知っている顔が。

「なに、そのかわいこちゃん、玲奈の知り



## 第二話 いやな男

「合い？」

「わたしの妹よ……あれ、そっちはひよっとして誠一くん？ ヤダ、あんたたちできてたの？ ラブホテルにしけこむなんて、大人になつたものねえ……美奈もやっぱり女だったのねー」

似たり寄つたりの声の彼氏に応え、カラカラと笑う姉。

「そうだ、久しぶりに顔を合わせたんだから何かおごるわ。近くに口ロスがあるから、そこでピザでもどうよ。ね？」

「そりゃいいな。玲奈の妹ちゃんならオレもおごるよ。そっちの彼氏くんも面倒見るからいこうぜ、な？」

誠一と美奈の背後に回り、ふたりは背中を押してきた。

強引な誘いを断れず、ふたりは件のファミレスに連れられていってしまふ。

この時、何が何でも断ればよかったのだ。

美奈たちの街はベッドタウンで、住民の多くは帰省中だった。

その影響か、夕食時だというのにファミレスはかなり空いている。

四人が一番奥の禁煙席に陣取ると、程なく注文の品が運ばれてきた。最初の一品は、玲奈たちが頼んだクリームソーダだった。

「チュ〜ツ、ジュルル……ジュル〜」。  
「んくんく……ぷはあっ……ヤツた後の一杯は美味しいねえ〜」

口元を拭う玲奈の仕草は、仕事帰りにビールを飲む中年サラリーマンのそれである。

「まったくだなー。君らは本当に飲まないの？ ヤツた後の一杯は本当に美味しいぜ？」

玲奈の彼氏は不思議そうに見てくるが、目を丸くしたいのは美奈の方だった。

（信じられない……よくできるわね……）  
玲奈組は、一杯のグラスに二本のストローを突き立てている。

つまり、ふたりで同時にクリームソーダを啜っているのだ。

生真面目な美奈にはとても恥ずかしくてできないことを、姉カップルは平然と行っている。

珍獣でも見るような顔をしているあたり、

誠一も美奈と同じ感想なのだろう。

玲奈たちは、運ばれてきた料理も同じ風にとった。

互いに食べさせあい、口移しすら当たり前

## 私と墮つたスワッピングでどきどき手

のようにやって見せる。

料理の皿の最後の一掬いに至っては、そのままベレーに移行していた。親子連れがいればクレーム必至の行為だが、幸い店内は空いている。

ほかのボックスの客が目にしても、好奇の目で見るか眉を顰めるかというだけで、店員にクレームをつけようとする者まではいない（これって一種の公害じゃ……仲がいいのはいいことだけど、TPOってものがあるでしょうに）

初めは気にしないでいられても、散々見せ付けられると腹が立つてくる。

真面目な性格の美奈は、チャラチャラした人間は基本的に好きではない。

姉の八幡玲奈は二つ上の二十歳。

昔は尊敬できる実直な女性だったのだが、大学入学後にふしだらになり、今では派手な格好を好む節操のない女に変わり果ててしまっていた。

掛け値なしの美人ではあるものの、どこか淫蕩な雰囲気醸す。

美奈に負けないきめ細かい雪肌は芸術的で、はちきれんばかりの媚体は女と言うよりも牝という言葉の方がしっくりくる。

金髪のロングストレート。ぽつてりした唇にはピンク色のルージュが塗られている。切れ長の目はどこか弛んだ印象を与え、妖艶な雰囲気に拍車をかけている。

真っ赤なタンクトップとホットパンツという服装は、妹に勝るとも劣らないグラマーな肢体を強調していた。

一回り小さいのを身につけているのは、豊かな肉体を誇示するための作戦だろう。

黒く照り光る紐のサンダルを履いていて、足首には金色のアンクレットがしてあった。

このバカ姉は、アンクレットの起源が奴隷の足かせだと知っているのだろうか？

（姉さんも姉さんなら、彼氏も彼氏よね。類は友を呼ぶってどこかしら）

玲奈の彼氏は二十一歳。彼女と同じ大学に通っている。

料理が運ばれてくるまでにしあつた自己紹介によると名前は、東都勇二。

筆で書いたような「漢」というプリントがされた真っ白いTシャツと、灰色のハーフパンツを履いている。

顔は野性味のあるアイドル系で髪は短髪。

身体は、ちよつとしたボディビルダーみたいに筋肉質だった。身長は、百七十四センチ

の誠一を微かに上回る。

エステで焼いたのだろう。肌は程良く浅黒く、デキモノや黒子の類は見当たらない。露出している足にも、体毛は一本もなかった。

玲奈のアンクレットに似たネックレスをかけ、同色のブレスレットを複数はめている。

いかにも、繁華街でナンパでもしていそうな若い男である。

美奈にとっては、自分とは正反対の性格に変わり果てた姉と同様、知り合いにすらなりたくない相手であった。

「ぶはー、美味しかったあ。エッチの後のお腹空いた時っていうのもあるけど、やっぱり大勢で食べると美味しいねー」

「だな。玲奈や美奈ちゃんのようなかわいこちゃんと一緒だと尚更だよなー。な、誠一クン」

「は、まあ………そうですね」

仲睦まじすぎる様子に驚くのを乗り越して呆れていた誠一が、珍しく気の抜けた返事をしていた。

「で、美奈。あんた、誠一クンと何回やったの？ どんな体位？」

「姉さん………！ こんなところでそんな話………恥ずかしくないんですか？」

やたら目を輝かせて聞いてくる姉に、妹は常識人の顔で窘める。

「なによー。ラブホでばったり会っておきながらカマトトぶるの？ いいわよ、誠一クンに聞くから。ねえ、誠一クン、どうだったの？」

「ずいっと身を乗り出して、対面に座る誠一の手を取る。」

「いやそれは………何というか………」

「あー、わかった。あんたたち未遂だったんでしょ。だよなー、クソ真面目な美奈が、そう簡単にセックスなんてできるはずないよねえ」

赤面でもしたのなら、恥ずかしがって言えないと判断されたかも知れない。

だが、誠一は言葉を濁しながら気まずそうに視線を落としている。それで見破られたのだろう。

「まあ、ウブなカップルにはありがちなことだ。あんまり言うなよ玲奈」

勇二は訳知り顔でうんうん頷いている。

「そうだ、ならスワッピングしない？ お互い、パートナーをチェンジしてエッチの練習をするのよ」

「そりゃあいい。経験豊富なオレや玲奈にレクチャーされた方が、セックスもやりやすく

## 第二話 いやな男

## 私とされた墮でスワッピングで手ほどき

なるだろうからな。冴えてるなお前ー」

「ちょ、ちょっと！ 何を勝手に進めてるんですか？ スワッピングってなんなんですか？」

初めて聞く、スワッピングという言葉の意味はわかりかねたが、どうも不穏当な気配がしてならなかった。

「だから、わたしが誠一クンと、美奈が勇二とカップルになってエッチの練習をするのよ」

「それって……好きでもない相手と性的な行為をするってこと……!?」

「うん。こんなの誰でもフツーにしていることだから、驚くことはないわ。あくまでレクチャー、演習を加えた講義なんだから浮気の内にも入らないしね」

「冗談じゃないわ、どうしてそんなこと……!」

例え、練習であつても告白を受けた男性以外の異性と性的な行為を行うなど、裏切りとしか思えない。

それに、好きでもない、ましてや嫌いなタイプの男の相手をするなど、考えただけでゾツとする。

「んーまー、でもさ恋人同士なのにセックス

できないってのは問題だぜ美奈ちゃん。セックスレスで離婚する夫婦もいるんだし、ダチの中にも、そうやって別れた連中は割とい

し」  
初対面でちゃん付けしてくる無礼な男の言葉だった。美奈をギクリとさせた。

そんな話は美奈も聞いたことがあるから。男性の告白を受け、恋人になると決めた以上、自分は誠一に性的にも尽くさなければならぬ。

手淫で射精してくれた時の誠一の嬉しそうな様子は美奈にとっても喜ばしく、できれば何度も、そして深く満足させてあげたいとも思った。

けれど、今のままでは不十分だ。

このまま交際を続けていけば、事態がいいほうにいくという保証はない。

もしかしたら手淫止まりのまま、結果誠一に愛想を尽かされるといふ未来が起ころないとは言切れない。

美奈は黙り込んでしまふのだった。

## 第三話 フェラチオ・レッスン

「お、美奈ちゃん早いねー。約束の時間まではまだ二十分あるのに」

「定刻よりも早く来るのは常識ですから」

まるで友人を相手にするかのように気安く接してくる勇二に、美奈は硬く冷たい声で応じる。

勇二は背中に「気合い」とプリンとされた白Tシャツにジーパンという格好だった。

対する美奈は、水色の上着と濃紺のロングスカートというストイックな出で立ちだ。

昨日は初夏並みに汗ばむ陽気だったが、今日は秋口のような天候だった。

姉たちと出会った翌日、美奈は勇二と待ち合わせたファミレスに訪れている。

結局美奈は、恋人の誠一を喜ばせる女になりたい一心で、姉と勇二が提案してきたスワッピングレッスンを受けることにした。

恋人でもない男であり、知り合いにもなりたくはないタイプの男と性的行為を行うのは、正直吐き気がするほど嫌だった。

しかし、堅物の自分がいつ、誠一を心底満足させられるようになるかはわからない。も

しかしたら、ずっと恋人のペニスを受け入れられないままだという可能性も否定できない。それは、告白を受け入れた女としては不義理すぎる。

相手が嫌がったらやめる。これ鉄則ね

勇二が言い出したルールが背中を押した。スワッピングはあくまで合意して行い、相手が拒絶したら必ずやめる。

嫌いな姉の恋人と言うだけの、チャラチャラした男との約束など、薄氷を踏むようなものであるが、保険はかけてある。

バッグの中にICレコーダーを忍ばせているのだ。

おかしな真似をした時は全力で抵抗するつもりだし、その時は約束を破ったという以前に犯罪行為なので、証拠音声と共に警察に被害届を出す気でもいる。

体面を気にして泣き寝入りをする気持ちなどはさらさらない。

自分を穢したツケは、徹底的に払わせてやるのだ。

「ハハ、あんまり好かれてないねーオレ。そんな怖い顔しないでよ美奈ちゃん」

能面同然の無感情な顔でいる美奈に、勇二

## 私とされたでスワッピングで手ほどき

は苦そうな愛想笑いをする。

「別に。これは地顔です。それよりも早く講義をしてください。時間は無駄にしたいくないので」

「りよーかい。それじゃ、ついてきてよ。すぐそこだからさ」

連れられて行ったのは、駅前のマンションだった。

白い外壁はピカピカで、築十年も過ぎていないかも知れない。

自動ドアのエントランスも塵一つ落ちていず、床や壁にはミリ単位の染みさえ見当たらなかった。

エントランスの奥にある居住スペースへの出入り口は、生体認証が採用されていた。

勇二は面倒そうに網膜と指紋でロックを解除すると、エレベーターに乗り込んだ。

「す、すごい所に住んでいるんですね」  
マンションというよりもオクシオンか。マ

ンシオン住まいの女友達は何人もいるが、彼女たちの住居とは次元が違う。

高級という枕詞をつけても役者不足に思える。駅前という地価の高い場所の、このような豪華なマンションの価格は見当もつかなかった。

「まあ、居心地はいいかな。入る度に機械に目を見せたり、指紋を押しつけるのは面倒だけどね」

「ひよつとして、おひとりで住んでいるのですか？」

エントランスには、駅のロッカーみたいな大きな荷物受けがあったが、その一角には東都勇二という表札もあった。

「うん。大学入った時に一人暮らしがしたいって言ったら、親父が買ってくれてね」

金持ちのボンボン男に、美奈は思わず渋面になる。

軽佻浮薄そうな男は随分と恵まれている。

いや、恵まれているからこそ、こんな人間が  
できあがるのか。

どちらにしろ、美奈の勇二に対する心象は  
ますます悪くなった。

庶民の嫉妬であるとはわかっていているもの、  
だからといって感情が止められるわけでもない。  
相手が品行方正で真面目な性格ならば、  
多少はよるめいたかも知れないが。

「あ、勇二。掃除終わったからアタシたちは帰るね」

「失礼します、勇二さん」

勇二の部屋がある階の廊下で、ふたりの女

性と出くわした。

一人は勇二と同類の派手な格好をした女。もう一人は対照的に清楚な女性で、白いワンピースを着ている。どちらの歳も勇二と同じ位か。タイプは違うが、ふたりとも美人だった。

そして、揃いのアンクレットをつけている。玲奈と同じデザインだった。

「サンクス。いつも悪い。礼は後でするからさ」

「絶対だよ……………で、そっちのかわいい子が新しいアイジンさんなの？」

「綺麗な方……………真面目そう……………勇二さんのタイプですね」

「違う違う。この子は玲奈の妹さんの美奈ちゃん、彼氏もいる子だぞ。オレが恋人がいる女に悪さするはずないだろ？ ちよっとお勉強を教えるだけだよ」

「アハハ、よく言うよ……………でもこの子、昔の玲奈とそっくりだねえ……………美奈ちゃん、だっけ。彼氏いるなら、このオオカミオトコに気をつけなよ」

妙な言葉を残し、派手な女が去っていった。ペコリと一礼した後に清楚な女性も彼女を追う。

「ひよつとしてあの人たち……………恋人なんですか？」

「ステディーってよりセフレだけだね。あ、セフレってのはセックスフレンドってことで、要は身体だけの付き合いって意味。たまに掃除やメシの用意を頼んだり、自分から世話を焼いてくれることもあるけどさ。今日もそんな感じ」

（まさかと思っただけど、姉さんと付き合い合っているのに他の女とも関係をもってるなんて……………しかも身体だけの付き合いだなんて……………そんなことがありえるの？）

貞操観念の強い美奈には信じられない概念だった。

しかも、軽そうな女も真面目そうな女も、他の女と肉体関係を持つている勇二に何の疑問も不満も持っていないらしい。

先ほどのふたりの態度は、まるで愛する恋人に接するようなものだった。勇二が言うように、本当に身の回りの世話までしているのなら、決定的だろう。

彼女たちは、ふしだらな女性関係を肯定しつつ、勇二とセフレでいるのだ。

勇二に対する悪感情は、彼を知るほど膨らんでいく。

## 私と墮つたスワッピングでどきどき手

「ここがオレんちだよ」

勇二の部屋は最上階。マンションは上の階ほど高価であることを考えれば、高級すぎるオクシヨンの一番高い部屋ということになる。女たちが掃除をした後だったので、勇二の住居は綺麗だった。

かなり広いというのに、ゴミなど一つも落ちていず、散らかった場所もまったくない。家電品や家具は新品みたいにピカピカだった。

ミントのいい匂いが漂っているのは、女たちが芳香剤を残したからだろう。ソツなく女性的な気配りがなされているのは、勇二への深い愛情故か。

スワッピング講義の部屋は、書斎のような一室だった。

広さは二十畳はあるだろうか。誠一と過ごしたラブホテルの部屋ほどもある。

オフィスチェアが備えられたパソコンデスクには、デスクトップPCと無線マウスが置かれてある。壁際には本棚が並んでいて、意外にも学術書が収められていた。

青空と雲だけが見える正面のサッシからは陽光が注いでいて、部屋の中央に置かれたダブルベッドを照らしている。

「それじゃ、始めようか。まずは服を脱いで」

言いながら、美奈の前で勇二は裸になった。

短髪で、野性味のあるハンサム顔の男は全身が浅黒かった。やはり日焼けではなくエステで綺麗に焼いたのだろう。まさか、全裸で日に当たっていたわけはないはず。

肉体は筋肉質で引き締まっている。足だけでなく全身の体毛が丁寧に処理されていた。股間も無毛だった。

(何これ……嘘でしょ……!?)

女に見られているというのに、勇二の逸物はムクムクと膨張し、ほどなくして完全に勃起した。

サイズは誠一の物を上回っている。

彼に見せられたDVDのAV男優に匹敵する肉棒なのだ。

長さは二十センチ弱はありそうで、太さは指数本分は下らないだろう。

すっかり皮の剥けた亀頭は赤黒く、やたらツルツルしている。

浅黒いというよりもドス黒い皮の竿には、金網みたいに太い血管が何本も浮いていた。

青い物もあるが、紫色の血管の方が多い。

根本にぶら下がる陰嚢も、手では掴めなそうなの位に大きく、見るからに重そうな睾丸はうずらの卵大だった。精子の製造能力も貯蔵



能力も、きつと誠一を上回るだろう。見るだけで、絶倫という言葉を意識せずにはいられない。

（気持ち悪い……こんなのを相手にするなんて無理よ……）

もしも相手が誠一ならまだ耐えられただろうが、好感度が絶対零度並みの男であれば、嫌悪感しか感じない。胸の奥もムカムカしてくる。

「ほら美奈ちゃん、裸になって。今日はフェラのレッスンをやるからさ」

「フェラ……フェラチオ……!?!」

ウブな美奈も口淫は知っている。誠一に見せられたDVDで、女優が行っていたのを見たが、排泄器官でもある男根を口で奉仕するなど、想像するだけで目眩がする。

「そう、フェラチオ。知ってるなら話は早いや。男はフェラされるのが大好きな生き物だから、誠一クンにしてやると凄く喜ばれると思うよ」

勇二は枕元に置いてあった携帯電話を手にとった。通話中らしく、画面が光っている。

テキパキと操作して音量を上げる。

「チュプツ、チュプ……ッ、んふう……誠

一クンのオチンポ、凄くビクビクして……そ

んなにわたしのフェラがいいの、チュルルッ」  
姉の声だった。酷く粘っこい媚声で喋り、千歳飴でも舐めているような音を立てている。  
「いいです……うあ、すごっ……玲奈さん、上手すぎ　ウツ、ああ……出る……また出る……ッ」

「せ、誠一……のこえ……」

姉の玲奈と恋人の誠一は、他の場所でスワッピングをしているはずだった。

その様子が、携帯電話を通じて聞こえてくる。

誠一の上擦った声は酷く情けなかったが、とても気持ちよさそうだった。

「いいのよ、また出して、全部飲んであげるから、ジユプ……ッ、美奈とじゃ楽しめないフェラチオを、思いつきり楽しんでね、ウフフ、チュルル、チュル……ッ!」

「ね?　誠一クンもフェラ好きだろ?　だからさ、オレを練習台にしてフェラテクを磨くんだよ。きつと大喜びしてくれると思うぜ?」

恋人が他の女　よりによって大嫌いなチャラ女であるところの姉に骨抜きになっている様子は、衝撃的だった。

自分に告白しておいて玲奈の奉仕でうっと

## 私とされた墮つでスワッピングでどきどき手

りしている誠一に、怒りや悲しみを感じるが、それ以上に敗北感を感じた。

どうして、あんないい加減な姉が誠一を恍惚とさせられるのか。

軽蔑していた相手に、見返されたような悔しい気分である。

「わかりました。宜しくお願いします」

怜悯な声音に怒気を孕ませ、玲奈は服を脱いだ。

異性では誠一にしか見せたことのない見事な裸体を、嫌いな男に晒す。

身に着けるのは黒髪をポニーテールにして、いる細い白リボンと、告白を受け入れた後に誠一から贈られた金色のペンダントである。

美奈にとっては、婚約指輪や結婚指輪と同じように、誠一への気持ちを表彰するアイテムであり、勇二に対して自分は誠一の恋人で、貴方と性行為を行うのは仕方ないから、ということを主張するシンボルだった。

「ほえ、いいカラダしてるね美奈ちゃん……玲奈の奴より断然そるな！。これでフェラテク身につけたら、きっと誠一くんもメモロだぜ」

（そんなの当たり前よ……姉さんなんかに負けるものですか……！）

女としての自尊心をくすぐる賞賛をいきあしにして、美奈は勇二に跪く。

（……っう……でも……間近で見ると……すごい迫力で……グロテスクだわ）

肉棒は、割れた腹筋の眼前まで反り返っている。間近で見ると、気色の悪い配色や生命力溢れる脈動がより鮮明にわかる。

ペニス全体から放たれる、夏の熱気じみた熱波が、美奈の顔面をやんわりと炙ってきていた。

「根本を持って水平に倒して」

美奈は虫でも摘むような所作で根本を掴み、自分の方へと倒す。

反り返る力はまるで厚いゴムであり、肉棒が孕む熱は焼いた串のそれだった。

（悪臭はないわね……それどころか、ミントの匂いがする……）

亀頭や竿には塵一つ付着して、不快な臭いも放っていない。それどころか、ミントの爽やかな香りがするのだ。

「美奈ちゃんところする予定だったから、風呂に入って綺麗にしておいたんだよ。ついでに、しゃぶり易いよう、舐めても平気な香水をふりかけてんだ」

（……見かけに寄らず気遣いはできるのね）

### 第三話 フェラチオ・レッスン

ほんの少しだけ感心し、改めて鼻を鳴らす。何度嗅いでも悪い気はしない。匂いがいいせいか、グロテスクな肉棒への嫌悪感も幾分和らいだ気がする。

「それじゃ、亀頭の先っぽからペロペロ舐めてみて。毒じゃないし、清潔にしているから安心して舌を這わせてみてよ。ソフトクリームを舐める要領とかで」

腰に手を当て仁王立ちする勇二は、頭上からレクチャーしてくる。

直立する男性へのフェラチオは、誠一と鑑賞したDVDでも見たプレイだった。それを思い出しながら、美奈はおずおずと舌先を伸ばす。

ペロ……………ペロ……………ペロ……………ペロ……………

火山の火口みたいな先端を正面からペロペロ舐めると、プリプリした亀頭の感触が舌に伝わってきた。

肉棒がビクツと跳ねた。根本を掴んでいる手を思わず離しそうになる弾みようだった。

(うう……………私今、誠一以外の男のペニスを舐めてる！)

彼を喜ばせるため、姉に負けないためとはいえ、不義を働く意識が胸をチクリと刺す。

「その調子その調子。取りあえず、亀頭全体を舐め回して、美奈ちゃんのツバをオレの亀頭に塗ってよ」

恋人にもしたことの無い行為を要求され、思わずしたくないと叫びそうになったが、ここにこうしている理由を思い出して踏みとどまった。

肉付きも色合いも薄い唇の隙間から舌先を伸ばしたまま、言われた通りに舌を動かす。

亀頭の先端に唾液を塗ると、今度はカリに続く中腹。皮の裏まで唾液をつける。パラソルのように開いた高いカリとその裏側も隈なく舐め歩く。

好きでやっていると言うよりは嫌悪感を押し殺してしているので、顎や舌が不必要に強張ってしまい、唾液を塗っている間は小刻みに震えてしまっていた。

「よおし、いい子だ。それじゃ、今度は亀頭だけを頬張ってみて。亀頭だけだよ、竿の方までいいから」

「は、はい……………わかりました……………」

(うう……………今度は口に入れるだなんて……………)

美奈は嫌悪感を無視するために、ギュツと目を閉じて一気にパクリと啜え込んだ。

(あ、熱い……………硬い……………ッ！)

## 私と堕つたスワッピングでどきどき手

口の中いっぱい広がる亀頭のプリプリ感。ミントの心地よい香りは、肉棒への嫌悪感を誤魔化すように鼻腔をくすぐる。

ドクドク脈打つ振動が、触れている唇の裏と頬の裏の粘膜から顔面全部に行き渡り、頭の中まで揺さぶられる。

カリ首の高さが並外れているので、美奈は口を目一杯開けさせられていた。

亀頭を頬張る口の端から唾液の筋がツーツと垂れて、恋人から贈られたペンダントを汚す。

「そのまま唇と頬を締めながら頭を前後に振って亀頭を磨くんだった」

DVDで見たプレイなので、すぐにイメー

ジが湧いた。  
それに従い、目を強く瞑りながら美奈は頭を振り始める。

じゅぷううう……じゅぷぷ……  
ジユプウツ……ジユプウウウ。

唾液をすする音よりもさらに粘っこい卑猥な水音とバキューム音が木霊する。

(こんなこと……屈辱的だわ……男って、こんなことで喜ぶものなの……?)

異性の性器を口で奉仕するなど、女をバカにしたプレイである。

しかし、電話越しに聞こえてきた誠一の声は、姉にフェラチオをされて確かに恍惚としている風だった。

彼と鑑賞したDVDの男優も、しきりに気持ちいい気持ちいいを連呼していたが。

この勇二のペニスも気持ちよさそうにビクついている。

誠一に手淫をした時、彼の肉棒は快感が大きくなると執拗にビクンビクン跳ねていた。

それを考慮すれば、やはり口淫は男にとって快感なのだろう。

「おおっ、いいぞ美奈ちゃん。すっげえ気持ちいい。玲奈に聞いた通り、呑み込みの早い優秀な学生さんだな。それじゃ、その要領で

今度は根本まで磨いてみようか」

(根本までなんて……でも、誠一に喜んでもらうためなら……!)

恋人でない男の肉棒を深くストロークすることに貞操観念が疼いたが、自分を納得させて実行する。

「ぢゅる……ンフウツ、ンフウツ、ジユブ  
ブウ……ンフウツ」

鼻息を荒らげつつ、凹ませた頬の裏の粘膜を当てながら根本まで研磨する。

小鼻を広げ、暴風のような鼻息音を嫌いな

### 第三話 フェラチオ・レッスン



## 私とされた墮でスワッピングで手ほどき

男に聞かせるのは猛烈な羞恥心を伴う。

顔が赤面し、悩ましく眉目がたわんでしま  
うのを止められない。

けれども、口が塞がっているのだからどう  
しようもなかった。

（ペニスが重い、わ……………顎にずっしりき  
て……………苦しい……………）

恋人のよりも長大な肉棒は、重さも甚だし  
かった。これを頬張る位なら、バナナやフラ  
ンクフルトを丸飲みした方がラクかも知れな  
い。

後れ毛を揺らしながら頭をゆっくり前後さ  
せる度に、釣り上げた魚のようにピチピチ跳  
ねるペニスの振幅も気持ちのいいものではな  
かった。

ペニスがどんどん赤熱し、湿気たつぷりの  
熱波が口内を満たすのもよくはない。

よくよく気をつけないと、亀頭の先が口蓋  
の後ろに当たり、えずいてしまうというのも  
面倒だった。

「あー、チヨー快感だぜ美奈ちゃん。いい感  
じだ。すごく上手いよ。慣れてきたら、頭の  
振りを早くしてくれな。そうした方が男は気  
持ちいいからさ」

美奈は言われた通りにする。後れ毛が振り

子のように前後するほど頭の振りを早くする。  
すると、程なくして鈴口の先端から先走り  
汁が漏れてきた。

トロツとして熱く、苦しよっぱい汁は酷く  
不味い。

（こんな不味いの……………とても飲めない……………一  
旦口を離して吐かないと……………）

そう思い、頭を後ろにスライドさせて肉棒  
を吐き出そうとすると、勇二が頭をガツシリ  
掴んだ。

「ふう……………ふうー、お、カウパーが出てきた  
んだな？ 美奈ちゃん、そいつを飲むんだ。

飲まれた方が男は喜ぶぞ？ はあつ、バキュ  
ームして吸って、口を締めてする肉棒磨きも  
続けるんだよ」

勇二は許す気はないらしい。頭を握る手に  
力を込めて、美奈を逃がそうとしない。

「ンムツ、チュ……………コクン、ン  
フウツ、アムツ、ジユププ……………ンクンク……………」

仕方なく、美奈は勇二の先走り汁を吸い飲  
む。

淫らな口淫ストロークを継続しながら。

（苦しよっぱい……………美味しくない……………）

勇二の肉棒は暴れているように振幅してい

### 第三話 フェラチオ・レッスン

る。

女に汚液を飲ませて興奮しているのだ。

(嫌だけど……誠一のため、だから……)

ああ……嫌だけど……)

やがて、カウパー汁に精液が混じりだし、苦みが濃厚になっていく。

舌に押し掛かる汁の重みも増し、自分が性的な体液を口に行っていることを強く意識させた。

「よおし、上手かったぞ美奈ちゃん。合格だ

……はあ……はあ、仕上げは顔射だ……本当

は射精精液も飲んだ方が男は興奮するけど、

今日は、おオっ、顔射だ……でも、顔射も男

は喜ぶからね……んっ」

美奈の唾液で全身を照り光らせる肉棒が大きく跳ねたと思った矢先、勇一が腰を引いた。

「オラッ、彼氏持ちの美奈ちゃんに、オレの

キイッたねーザーメン顔射だ！」

ドビュンッ！ ドビュビュビュビュ！ ド

ビュ~~~~~ッ！

勇一の荒々しい叫びと呼応するように、口から離れてへそまで反り返る途中だった肉棒が白濁液を吐き出した。

「え……あぁっ、ああああああアアア

アア~~~~~」

視界一杯に押し寄せてくる白濁汁の奔流に、

美奈は驚きの声を上げた。

栗の花臭を放つ粘液塊は、艶やかな黒髪に、メガネに、頬に飛散し、叫んだ拍子に開いてしまった口内に飛び込んでいく。

勇一の精液を浴びたくなどなかったのだが、ガツシリ頭を掴まれているので逃げることもできない。

「ふへっ……へへ……綺麗だぜ美奈ちゃん……こいつがオレのザーメンだ……！」

平均的な男の射精量は、おおむね小さじ一杯程度。

それを上回る量を放出してから、勇一の肉棒31はようやく萎え始める。

「はああ……ああ……私……精液……顔に浴びて……」

誠一から贈られたペンダントまで白濁塗れにしてしまった美奈は、呆然と呟いた。

手ほどきスワッピングで墮とされた私





## 第四話 パイズリ・レッスン

「ンフツ、チュププ、んくつ……じゅぶつ、  
じゅぶつ、ジユブブツ……コクンツ」  
「そうそう、いい感じだよ美奈ちゃん。二回  
目とは思えないね」

跪いてフェラチオする美奈に勇二が賞賛を  
送る。

ゴツゴツした両手は、美奈の頭に添えられ  
ており、時々髪を梳きながら撫でてくる。

美奈は上目遣いをして目だけで微笑んだ。

あくまで演技なので、ぎこちなかったが。

そうした方が男が喜ぶと言われたから実行  
しているのだった。

（まるで恋人気取りで……調子に乗って）  
腹は立つが、ぐっと耐える。

恋人の誠一を満足させられる女になるのに、  
この男との講義は役に立つかも知れないから。  
昨日、勇二が自分勝手に顔射したことに対  
して美奈は抗議した。

相手の意志を無視するのは事前に決めてい  
たルールに反するからだ。

チャラチャラした男のこと、きつと逆上す  
ると思った。意識がかすんでいたのでよく覚

えていないが、射精する直前にはかなり乱暴  
な言葉遣いもしていたはずだ。それが本性な  
のだろうと思った。

ところが、彼は案外実直に謝ってきた。そ  
れどころか、風呂場で丁寧に汚れをとってく  
れもしたのだ。

意外な展開に氣勢を削がれた美奈は、明日  
もスワツピング講義を受けると約束してしま  
ったのだった。場所はやはり勇二のマンショ  
ンである。

後で聞いた話によると、美奈の承諾を聞い  
た玲奈は、また誠一と会う約束をしたのだそ  
うで、今日もふたりは他の場所で性交渉を行っ  
ていた。

（姉さんを見返すためにも……耐えてテクニ  
ックを身につけなくちゃいけないし）

勇二との情事後、誠一に電話をしてみ  
るとどうやら玲奈との時間はそれなりに楽しん  
だようだった。

恋人の美奈にすまないという気持ちも滲ん  
でいたが、玲奈と蜜時を過ごせることへの期  
待感も感じられたのだ。

「それじゃ、そのまま頬を凹ませながら亀頭  
だけをゴシゴシしゃぶって、空いてる手で竿  
を扱ってみようか。もう片方の手は玉袋を揉

## 私とされた墮でスワッピングでどきどき手

んでもらえるかい？」

美奈は上目遣いで頷くと、言われた通りに行動する。

勇二は浅黒くて逞しい裸体を晒し、美奈もほとんど全裸という格好だった。

美奈が身に着けているのは、髪をポニーテールにする純白リボンと、誠一にプレゼントされたネックレスだけである。

講師を務める勇二は、他の男と恋人関係にある美女の媚体を見下ろし放題だった。

「ンツ、ンツ、むふううう……ジュプ、ジュプ、ンフ。ジュルルル……コクコク」  
「シュツ、シュツ、モミモミ。シュツ、シュツ、モミ……モミ。」

頭を前後させ、手で竿を扱く振動で、鎖骨との高低差が激しいメートルオーバーの乳房がゆっさゆっさとのんびり揺れる。

鎖骨の前で後れ毛が同じように前後している様子も色香を醸す。

「淫奉仕する美奈の肌は白くてきめ細かい。室内照明を反射して、澄んだ水面のようにキラキラしていた。」

足指を立てて跪いているので、たっぷり肉の詰まった尻が背中から突き出ている。

そして胸元では、他の女の女であることのシンボルであるネックレスが、飛び散る美奈の唾液を浴びて汚れていた。

「そろそろ舌を使おうか美奈ちゃん。亀頭の先っぽや皮の繋ぎ目、カリ首とその裏側もね。広い部分は舌の凸凹で擦る感じだよ。そうそう、鈴口をほじるのも効果的だから」

好きでもない男の言葉であり、想像するだけで嫌な寒気がしてくる行為だが、講師の指導には従わなければならぬ。

「ンフツ、ンムツ、ペロペロペロ、レロオツ、ジュプツ、ジュプツ、ンフー」  
頬を凹ませて頭を前後に振り、竿を手コキし、睨丸が見えなくなり始めた陰囊を優しく揉みながら、口内で舌を使う。

気持ちよさそうに震える亀頭の穂先を正面から上下に舐め上げ、数回往復した後、皮の繋ぎ目と亀頭の肉の間に、尖らせた舌先を軽く潜らせる。

カリ首は、舌の側面や舌体の凸凹で擦る。竿との境目部分である裏側は、力を入れた舌先で擦った。

舌に、亀頭の重さとプリプリした肉感が伝わってくる。

もう射精寸前らしく、亀頭は燃えるように

## 第四話 パイズリ・レッスン

熱くなっている。手のひらで扱く竿も、火傷しそうな位の熱鉄棒だった。

「ああ、気持ちいいっ、美奈ちゃん、先走り汁が出てたら飲んでね。カウパーの味に馴れておくんだ。今日の講義は精飲までいくよ、ふうっっ」

鈴口をそつと抉っていると、温かくて苦しよっぱい汁が漏れてきた。

細い喉をコクンコクンと鳴らす。美味しい飲み物とは思えないが、二回目だからか、初回ほどの嫌悪感を感じない。

「んくっ……はあっ……あの、せいんって何ですか？」

「そりゃあ、男の射精を口で受け止めて、出てくる精液を全部飲むことさ。男は、これをされるとしてくれた女にメロメロになるんだよ」

「せ、精液を飲むんですか……!?」  
ふと、誠一と鑑賞したDVDの映像が頭をよぎる。

あの中のでフェラチオシーンでは、男優が女優に精液を飲ませていた。ペニスを女の口に深々と突き刺し、小便でもするかのように尻を強張らせて白濁汁を放っていたのだった。

「誠一くんも喜ぶよきつと。そのために練習

しとかないと……どうしても嫌ならやらないけど、玲奈が言ってたぜ？ 精液を飲んであげたらすごく喜んでくれてたっさ」

そう言われては引き下がるわけにはいかない。

誠一を満足させられる女になるため、玲奈に負けないためにこうしてふしだらなレッスンを受けているのだから。

「わかりました……精飲………します………」

「そうこなくっちゃ。いいかい、全部飲むんだよ。大丈夫、毒じゃないからね。オレは好きなセックスを楽しめるようにマメに身体の検査を受けてるから、安全は保証するから」

美奈はぎこちなく頷くと、奉仕を再開した。啞え込んだ亀頭を舐め回しながら頭を振り、雄々しい脈動を感じながら竿を扱き、もうほとんど睾丸を掴めなくなった陰囊を揉む。

熱く滾る肉棒はどんどん強張り、断続的にピーンと突っ張り始める。

鈴口から漏れてくる苦しよっぱい汁の量が増し、苦みが強くなっている。

「ああ、いいよ美奈ちゃん、その調子で吸ってみて、亀頭を吸うんだ……そう、いい、ああ、気持ちいいっ、ああ、イクよ美奈ちゃん

## 私とされた墮でスワッピングでどきほの手

ん、美奈ちゃんの綺麗なお口に、射精するよ……！」

言われた通りにバキュームを織り交ぜ、美奈は射精させる目的でフェラチオ奉仕を継続する。

（なんだか……身体が火照ってきて……ペニスに奉仕しているだけなのに……）

射精直前の彼の雰囲気感に感化されたのか、身体がポツポツと熱を持つ。

心臓がドキドキと早くなっている。奇妙なことに、それには普通の動悸のような不快感はなく、逆に、切なさに似た鈍い心地よさを伴っている。

股間も妙に熱くなってきたおり、まるで焼き串でも押しつけられているかのようだった。「ほら美奈ちゃん、上目遣い。男は女の子に媚びた目で見られると弱いんだから。自分の奉仕で一杯射精してほしいって目で訴えるんだ、くう、ああ出る。ほんとにイクっ」

尻を強張らせながら叫ぶ勇二。

不可思議な火照りで半ば茫洋としていた美奈は、彼の言葉に従い、言われた通りに念じながら上目遣いをする。

（いっぱい射精してください……私の奉仕で気持ちよくなってください……！）

歯を食いしばって快感に耐える勇二の顔を見ながら、何度も胸中で唱える。

「おおおつ、出るツ、美奈ちゃんの口に思い切り出すよツ、全部飲むんだよ、彼氏のために！ ああ、イクイク……おおおおおオオオオ！」

全部飲めとの言葉に、美奈が目だけで頷いた刹那、勇二は彼女の頭をワシツと掴み、抑えていた精液の奔流を解放した。

ドブ~~~~ツツツ！ ドビュドビュ、ビュ~~~~！

「ンムウツ！ ングググツ、ンム~~~~！」

とても小さじ一杯とは思えない量の牡粘液が口内に飛び散った。

思わず静止する美奈。

一瞬、意識が真っ白になってしまったが、身体の反射反応が働いた。竿を抜き、陰囊を揉んでいた手が勇二の太腿を掴んだことで、美奈のバランスは保たれる。

ビュルルル……ドビュツ……ドグドグ……。

ペニスは、そんな美奈に構わない。

水を送りだしているポンプのように身体を痙攣させながら、何度も吐精していた。

第四話 パイズリ・レッスン



## 私とされた墮つでスワッピングで手ほどき

亀頭だけを啜えているので、放たれた精液は口内中を汚している。

喉奥、口蓋、並びのいい歯、歯茎。普段は食物を口に行っている器官一杯に、栗の花臭のキツイ、ドロドロの汁が撒き散らされる。

その熱さは熱を持つ口内でも明確に感じられるほど高温だった。

べったり付着されるとズツシリした重さを感じさせられる。それが、そこかしこで起きている。まるで、目一杯水を含んだよう。

そして、圧倒的な苦み。

重い白濁に伸し掛かられている上に、ビリビリする苦みを容赦なく味わわされるので、舌は麻痺したも同然だった。

(美味しくないッ……こんな絶対飲み物じゃない！)

前回も幾らか飲まされたが、量が違つてここまで違うのか。

心の中で悪態をつきながら、それでも彼氏のためと自分を叱咤しながら飲み下す。

「んぐっ……ごくっ……ゴク……ゴク……」

唾液を浴びせて粘度を落とし、喉に流す。

ツバで薄めたというのに、白濁液はしっかりと喉に絡みつき、胃に落としても胃を重くしながら不快感を充満させる。

だが、何故だろう。

口内で精液の感触を感じ、嚥下作業を行っている、股間の熱さが増していく。

指先でくすぐられていたような仄かな疼きも膣全体に広がっているようだった。

「よおし、偉いぞ美奈ちゃん。上出来だ」

わけのわからない身体の反応に戸惑いながら、気の遠くなる精飲プレイを終えた美奈を、勇二は見下ろしながら労った。

「まだ体力に余裕があるようだから、今度はパイズリにいつてみようか」

「パイズリ……パイズリってどういうプレイなんですか……？」

まだ頭がぼうつとする中、萎えないペニスを吐き出して尋ねる。

「チンポをオツパイで挟んで扱くのさ」

勇二はベッドの端に腰掛けて、美奈を手招きする。

「さあ、オツパイを左右に開いて、オレのチンポを挟んでみて」

(ペニスを……オツパイで挟む……の……?)

段々、意識がしんとしてくる。

思い起こせば、誠一と観たDVDでも胸でペニスを挟むプレイはしていた。

## 第四話 パイズリ・レッスン

「わかりました…………… やつてみます……………」  
膝立ちの美奈は、摺り足で勇二の股間に近づく。

胸を鷲掴みにすると、手のひらから乳肌をはみださせながら左右に開く。

「そうそう。もっと近づいて。チンポを胸板につけるんだ」

鷲掴みで乳房を左右に開いた状態で、さらに摺り足で接近する。

美奈の手の中の柔らかい乳肌が、歩く振動で波紋が広がるように波打った。

（あ、熱い…………… 私の胸に熱いペニスが……………）  
乳房の根本の間 細い胸板に肉棒が触れると、燃えているような熱感が皮膚に移ってきた。

「よし、いいよ。オッパイから手を離して」  
タップウウ、タップンツ、タパンタパンツツ。

美奈が手を離すと、乳房が元の位置に戻る。元に戻る力が乳房同士をクラッカーのように衝突させた。

きめ細かい白乳肌は量感を振り撒きながら振幅し、やがて静止する。

「あーあつたけえ…………… すんげえ柔らかいのに、外側からギュギュウ押ししてくる…………… 美奈ちゃんのおツパイは見た目もいいけど、挟まれて

も最高だよ」

他の男の恋人の乳房でペニスを包まれている勇二は喜色満面で賞賛する。

（ペニスが内側でドクドクツて脈打つて…………… 熱くつて…………… それに、ずしつとして…………… 硬くて……………）

口や胸板でも感じていたが、内乳全体でくるとみると感覚はまた違う。

燃えているような熱感、乳房をも熱くし、生命力溢れる力強い脈動は自身を包み込む乳房を内側からギュウギュウ押し返している。

カチカチの肉棒の硬度を感じていると、胸の奥が切なくなってくる。

先ほどから股間に起こっている奇妙な疼きも濃度を増し、指で膣を弄つてみたい衝動に駆られてしまう。

（私の身体…………… 変…………… 好きでもない男のペニスを胸で包んでいるのに……………）

身体の反応に戸惑っていると、勇二が声をかけてきた。

「美奈ちゃんのおツパイって、サイズいくつなの？ カップは？」

「百一のEカップです……………」

「おほっ、だよなっ、オレのチンポをここまでくるめるんだから、それ位はあるよな。百

## 手ほどきスワッピングで墮とされた私

一のIカー、AVでもそうそうないサイズだよな〜〜」

乳房の谷間から亀頭だけを飛び出させている男は、やにさがった笑みを浮かべている。

見下ろすのは、メートルオーバーの豊胸が自分のペニスを包み込んでいる様子。

体温を上げている乳房は細かい汗を噴き出している。それは乳肌をカバーする膜となり、汗膜はサッシから差し込む陽光を浴びてキラキラ輝き、乳房の張り艶の魅力を増幅していた。

勇二の亀頭のすぐ側、首の付け根には美奈が誠一から送られたペンダントがあるのだが、これは亀頭の陰になっているので輝いてはいない。

「それじゃ、さっきみたいにオッパを掴んで、内側に向かって捏ねてみて。そうやってチンポを刺激してやるんだ」

DVDでも同じプレイを観ていたので、やり方に戸惑うことはなかった。

だが。

ムニユリ、ムニユムニユ、タパン、ムニユツ、ムニユツ、グニグニ。

(やだ……これ、いやらしい……オッパイでペニスを揉んでみたいで……)

乳房を鷲掴みにし、指の間から薄ピンクの乳輪と乳首を覗かせながら、美奈は乳奉仕を継続する。

内乳にもみくちやにされているペニスは、先ほど放った精液の臭いを薄く漂わせながら、気持ちよさそうな力強い脈動を繰り返していた。

移ってくる熱気が乳房の体温を益々上げ、汗を噴き出させる。

噴出した汗は、乳房のツヤを増させるだけでなく竿肌と内乳肌の隙間に流れ込み、双方の肌を粘らせる。

密着しては吸い付き、美奈の動きにあわせて遠ざかってもしつこく貼り付き続ける乳肌は、美奈の握力を受けてペニスを刺激する。

「んっ、ンツ……はああ、熱い……ああ、身体が……胸が……」

「流石、優等生は呑み込みが早いね。もう板に付いている。次は、舌を伸ばして先っぽを舐めてみようか。フェラと同じ要領でいいからね」

「わかりました……はああ……ぺろ、ぺろ……へえあ……ぺろっ……」

首を前に傾け、唾液で濡れ光るピンク色の舌を唇の向こう側に突き出すと、ペンダント



第四話 パイズリ・レッスン



## 私とされた墮でワッピングスきどき手

トップの直上で亀頭の先端を舐め始める。

「チンポに気持ちよくなって欲しいって念じること忘れずにね。男とセックスする時にそういう風に自然に思えるようになるよ、きつと誠一クンとのセックスも充実するはずさ」

「んっ、ん、はい……ペロペロ、ふううっ、ペロペロ……ああ、ペニスに気持ちよくなって欲しい……私の胸と舌で気持ちよくなって欲しい」

「ペニスとか胸って言い方も、優等生らしい美奈ちゃんらしくていいんだけど、チンポとかオッパイって言った方が男は喜ぶよ。だから、ほら、言ってみて。チンポにオッパイだ」  
誠一と観たDVDでも、女優はペニスや胸とは言わず、オチンポやオッパイなどと口走っていた。

そうすると確かに、男の肉棒は益々脈動し、硬く大きく膨らんでいた。

勇二の言うことも道理だと思えてきて、はしたないとは思いつつ、卑語を口にしてみる。  
「お、オチンポ……私のオッパイと舌で気持ちよくなってください……ああ……オチンポ、オッパイと舌で気持ちよくなって……」

すると、乳房に押し潰されている肉棒が暴

れるように跳ねた。

「ああっ、ペロペロ、じゅるりっ……オチンポ、私のオッパイの中でこんなに震えて……」

自分の卑語と奉仕の成果で肉棒がのたうつ様子は、胸をじいんと熱くさせた。

今まで感じたことのない不思議な満足感が胸一杯に広がるのだ。

「いいよ美奈ちゃん、すごくいい……ほら、先走り汁はどうするのいいんだっけ？ どんな風にされると、男の気分がよくなるの？」

「チュムツ、チュル……ッ、ソフウ………コクン、ぷはあっ、れるれる」

美奈はフェラチオ講義で教えられた通り、先走り汁を吸い飲んだ。

亀頭の先端にキスをして、舌先で鈴口をほじりながらバキュームする。

流れ込んできたカウパー汁は、そのままコクンと嚙下した。

「先走りや精液を飲んだ後は、美味しいって笑顔になると、もうクリティカルヒットだから。男はそんな女を離したくないって思うよ。彼氏に実践できるよう、オレで一杯練習してね」

「ふあい、ンム、ペロペロ、ちゅるるる、ゴクンツ……はあああ、美味しいです、先走



## 私とされた墮とスワッピングできどき手

前髪に、額に、眼鏡に、細頬に、唇に、上乳に、嫌悪していた男の精液を浴びせられる。恋人に贈られたペンダントも他の男の精液を浴びて汚れ、栗の花臭の発生源となる。

「ハアツ、また顔に……ああつ、臭い汁が……熱くてベトベトの精液が私の顔に……！」

美肌に着弾した粘液塊は、彼女の汗と混じりあう。表皮の隙間に入り込み、美奈の隙間を埋めていく。

端麗な美奈の身体は牡粘液の臭いを放つ源となっていた。

「ほらほら美奈ちゃん。精液を浴びたら何て言うの？ 飲んだ時と同じだよ」

愛玩動物を撫でるように美奈の頭を撫でながら、勇二。

「はああ……オチンポ射精してくださってあげがとうございました……気持ちよくなってもらって嬉しいです……はへあ……」

顔を上向かせ、見下ろす勇二に向かって口角を釣り上げる。

恋人でもない男の精液を顔と胸に受け、嫌っていた男の牡汁の臭いを漂わせながら。

「いいぞ美奈ちゃん。よくできたね」

勇二の労いは美奈の胸をじいんと打つ。彼に対しては不愛想だった若娘は、自然に頬を

弛ませてしまっていた。

この体験版はここで終了します。  
続きは製品版でお楽しみください  
ませ。

第四話 パイズリ・レッスン

